

陳舜臣さんを語る会通信

NO.28

Mar. 2021

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2021年3月1日

神戸華僑歴史博物館「陳舜臣没後6年桃源忌特別展」(2021. 1. 21-2. 20) 開催

神戸華僑歴史博物館では、春節祭の時期、あるいは秋に特別展を実施するのが恒例になっています。今年は、1月21日～2月20日の会期で「陳舜臣没後6年桃源忌特別展」を企画、開催いたしました。

一昨年秋の「特別展 神戸華僑歴史博物館の40年」開催のあと、「これからの博物館運営」について検討され、①児童・生徒ほか、若い世代が興味を持つように展示を工夫する。②メリケン波止場の陳舜臣アジア文藝館(残念ながら、現在、休館中)と連携し、陳舜臣関係の情報発信に力を入れる。

などが話し合われました。

②の具体化が、陳舜臣コーナーの設置と今回の特別展です。

本通信、28、29、30号で、神戸新聞の取材記事(2021年1月29日掲載)と展示パネルの内容を取りあげました。

(編集委員 橘雄三)

特別展のポスター →



2021年(令和3年)1月29日 金曜日

陳舜臣さんの足跡たどる

神戸で特別展、来月20日まで

神戸市出身で2015年湾出身の貿易商の次男として亡くなった作家、陳舜臣さんの生涯を概観する「没後6年桃源忌特別展」が神戸華僑歴史博物館(神戸市中央区海岸通3)で開かれていて、作品に描かれた戦前の神戸や、中国各地を旅した足跡を、パネル展示などで紹介している。

陳さんは1924年、台湾位置を正確に反映している

六甲山系の再度山に1029回登った記録など、趣味だった登山にも触れる。家業を一時的に継いでいた55年、同業者らと映画や登山などの「趣味の会」に入っていたことを示す名簿も並ぶ。

太平洋戦争の終結とともに国籍が日本から中国に移り、89年の天安門事件後、再び日本国籍を取得した陳さん。72年の日中国交回復以降、精力的に中国や台湾の都市を訪れた。展示される地図上には、訪問した約50都市が示される。

展示に携わった同館運営委員の橘雄三さん(78)は「明石市には陳さんは異質な者同士が互いを受け入れ、共存する世界を目指していた。その思想を展示からくみ取り、あらためて作品に親しんでほしい」と話している。

特別展は2月20日まで。大人300円。開館は水・土曜と同14日。午前10時～午後5時。同館 ☎ 078・331・3855 (井原尚基)



展示風景

展示の中心は、左の写真正面、展示パネル十一面と左下隅、陳列ケース一台です。

同写真、柱に吊り下げているパネルは一九八二年、司馬遼太郎『街道をゆく―神戸散歩』「陳徳仁氏の館長室」取材時の座談風景です。

陳舜臣没後6年桃源忌特別展 No.1

陳舜臣さん略譜 台湾・大陸 旅の記録を交えて (1)

「陳舜臣さん略譜 台湾・大陸 旅の記録を交えて」を3分割で掲示します。参考図書は『青雲の軌』、『道半ば』、『Who is 陳舜臣』(集英社)、『陳舜臣中国ライブラリー 30』「年譜」(集英社)、『私の履歴書』(『日本経済新聞』連載)、『わが心の自叙伝』(『神戸新聞』連載)ほかです。

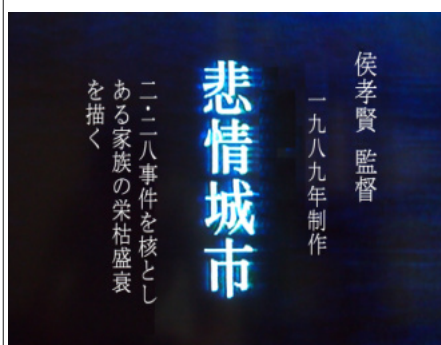
	← 青地は人生の転機	『 』は単行本
1924	2月18日 神戸市元町通7丁目で生まれる	
	「小学校にあがる前に、私は二度か三度台湾に帰省したようである」	
1931	9月 柳条湖事件起こる	
1932	小学3年になる前の春休み、祖父の法事で台湾へ帰る	
1937	7月 盧溝橋事件起こる 中学2年の夏休み、父をのぞく一家で台湾へほぼ一か月の帰省	
1938	7月 神戸大水害	
1941	4月 大阪外国語学校印度(インド)語部入学。12月 アジア・太平洋戦争始まる	
1945	3月17日 神戸空襲。「三色の家」のモデルとなった海岸通の家、焼失 8月15日 第二次世界大戦終結	
	「否応なく国籍を変更されたので、これまで自分に予定されていたコースが取りにくくなったのである。大阪外語は国立だから、その教授、助教授は国家公務員という一面がある」	
1946	2月末 広島県の呉港から帰国船に乗る。3月初旬、台湾の基隆に上陸。弟・本臣が継ぐ本家(父の従弟の家)に身を寄せる 新設された台北県立新莊初級中学の英語の先生にと懇願され、1949年の帰国時まで勤める	
1947	二・二八事件起きる(台湾)	
1949	10月 中華人民共和国建国 10月 陳舜臣さん日本に帰る 12月 国民党政府、台北に	
1950 ～ 1960	1950年3月 結婚。民間貿易が再開され、忙しくなった家業を助けるようになる 父の会社での仕事はもっぱら商用文を漢文で書くことで、いわゆる営業活動ではなかった 余暇は読書、翻訳、歴史研究に費やす 57年頃から小説を書き始め、59年頃には、作家を職業とする決意が固まる 60年 「風のなか」が第十一回文学界新人賞の最終審査候補作になる	
1961 ～ 1969	1961年8月 「枯草の根」で第七回江戸川乱歩賞を受賞。予想以上に多くの原稿依頼が舞い込むようになる。『三色の家』『弓の部屋』『方壺園』『怒りの菩薩』などを次々執筆 1967年『阿片戦争』。69年1月「青玉獅子香炉」で第六十回直木賞を受賞 この頃は、まだ台湾では国民党政府による出版物の検閲が厳しく、北京派と目されていた氏の作品は持ち込めなかったが、同作品は新聞に連載された	

◆戦後、陳舜臣さんが台北県立新莊初級中学英語教師として台湾滞在中の1947年、二・二八事件が勃発します。戦後、日本に代わって台湾を統治した国民党支配下で起こった事件で、闇

牲になりました。侯孝賢監督の『悲情城市』(1989年制作)の背景としても描かれ、日本でもよく知られています。

以下、『道半ば』の記述です。

「ただ銃声だけを聞いていたというのは口惜しいことであった。その音とともに、同胞の命が一つまた一つと消えて行くことを、そのとき実感できなかったことにたいして、私はいまでも罪悪感をもっている。そのとき、おまえはどんな気持ちでその音をきいていたのか、と問われると、— 祈りをこめてきいていた。と、答えるしかなかっただろう」



ばこの摘発をきっかけに、国民党政府に対する台湾人の不満が爆発、暴動となり、武力鎮圧で2万人以上が犠

陳舜臣没後6年桃源忌特別展 No.2

陳舜臣さん略譜 台湾・大陸 旅の記録を交えて (2)

1970	5月のアメリカ及びカナダ旅行に際し、中華民国パスポート取得
1971	5月 父・通逝去。76歳 『残系の曲』『実録アヘン戦争』
1972	9月 日中国交正常化(日台断交) 10月 初めての中国旅行。日本赤十字社が発行する証明書による探親訪問という形で、当時、北京放送に勤務していた妹・妙玲さんを訪ねる。香港から入り、広州、長沙、南京、西安へも
1973	8～9月 蘭州、酒泉、ウルムチ、トルファンなど、憧れの土地を初めて歩く。この旅を機に、中華人民共和国パスポート取得。以後、台湾に入れなくなる 『風よ雲よ』『柊の館』
1974	9月 北京、大連、陽泉、延安、西安、鄭州、南京、蘇州、揚州、杭州などへ 『青雲の軸』
1975	8月 家族4人で北京、西安、酒泉、敦煌へ 76年『敦煌の旅』76年『桃花流水』
1977	7月 「シルクロードの旅」取材でウルムチ、コルラ、クチャ、カシュガル、ホータンへ 『旋風に告げよ』『シルクロードの旅』 77-82年『小説十八史略』(1～5)
1978	8～9月 「中国やきもの紀行」取材で江西省景德鎮へ
1979	3月 「太平天国」取材で北京、長沙、桂林、南寧、桂平、広州へ 9月 NHK「シルクロード」第一集録画のため西安へ 10月 「天竺への道」取材でトルファン、クチャ、カシュガル、パミール、タシュクルガンなどへ
1980	4～5月 香港、厦門、福州、武夷山、南平、上海、鎮江、揚州(鑑真和上像里帰り法要列席)、南京、成都、樂山、峨眉山、洛陽、龍門、徐州、曲阜、泰山などへ 8月 NHK「シルクロード」第八集録画のためウルムチ、トルファン、ベゼクリフ、交河故城へ 80-83年『中国の歴史』(1～15)
1981	9～10月 北京、ウルムチ、イーニン、カシュガル(クルバーン祭)などへ 『江は流れず』
1982	4月-83年7月 「曼陀羅の人」読売新聞連載。かつてないほどの反応 『太平天国』
1984	4月 司馬遼太郎氏らと福建の旅。その後、「中国発掘物語」取材で北京、西安へ。8月 敦煌へ
1985	10月 林則徐生誕二百年記念シンポジウムに招かれ福州へ。寧波、舟山列島の普陀山、北京へも
1986	10～11月 浙江の取材。紹興では秋瑾故居見学 86-91年『中国の歴史 近現代篇』(1～4)
1987	4月 「茶事遍路」取材。成都、昆明、西双版纳(シーサンパンナ)タイ族自治州景洪へ 7月 台湾、38年にわたった戒厳令を解除 8月 妹・雪霞らと北京、承德、旅順、大連、天津へ。12月 上海、福州、泉州、安溪、厦門へ

◆1972年、日中の国交が回復すると、陳舜臣さんは、待ち兼ねたとばかりに中国旅行を開始、最初の旅行で、北京放送の記者をしていた妹の妙玲さんに会っています。妙玲さんは、1953年に祖国建設の情熱に燃えて中国に渡ったまま、中国での生活が続いていました。

そして、翌73年、陳さんは中華人民共和国のパスポートを取得します。

◆また、陳さんは『青雲の軸』で、1938年7月の神戸大水害を目の当たりにした主人公俊仁を、「俊仁はあたりを見まわした。彼はこのとき、目の前の濁流から、ふと黄河や揚子江を連想した。(こんな色だろうか?)まだ見ぬあこがれの祖国の山河」と描写しています。

妹・妙玲さん、そして陳舜臣さんの大陸への

思いの強さがわかります。

下の写真の3人は、戦後再開した神戸中華同文学学校特別班(第4届)の同窓で、3人とも台湾人です。のち、林麗韞さんは周恩来の通訳になり、曾月娥さんは陳舜臣さんの弟・仰臣さんと結婚します。



右から林麗韞さん、曾月娥さん
陳妙玲さん (写真は個人蔵)

陳舜臣没後6年桃源島特別展 No.3

陳舜臣さん略譜 台湾・大陸 旅の記録を交えて (3)

1988	1月 蔣経国総統死去。副総統李登輝が総統に 9月 四川省峨眉山に遊ぶ 『茶事遍路』
1989	6月4日 天安門事件
1990	10月 日本国籍取得。奥様の名前、蔡錦墩を陳未知に変更 12月 41年ぶりに台湾へ。李登輝総統訪問
1991	11月 台北、高雄、花蓮、台東へ 『諸葛孔明』
1992	9~10月 大連へ。「耶律楚材」取材で北京へ。長江三峡、豪華客船上で、シンポジウム 『琉球の風』
1993	1月 司馬遼太郎氏の「街道をゆく」取材同行も兼ねて台湾へ 司馬氏と李登輝総統訪問 4月 神戸から那覇、基隆へ（豪華客船「飛鳥」の旅） 5月 「耶律楚材」取材で北京郊外の玉泉山を訪れる 9月 台北へ。同市に「舜臣図書室」オープン
1994	7月 台湾へ 『耶律楚材』 8月 宝塚歌劇場で講演中に倒れ（脳内出血）入院
1995	1月13日 5ヶ月の闘病を終え退院。17日、阪神淡路大震災 10月 台湾へ
1996	4~5月 敦煌へ 5月 李登輝総統、台湾初の直接選挙で当選、再任 9月 台湾へ
1997	3月 テレビ朝日の取材で、北京、杭州、広州、香港へ 10~11月 台北、香港へ 『チンギス・ハーン一族』
1998	5月 上海、台北へ 『曹操 魏の曹一族』
1999	7月 「桃源郷」取材で雲南省へ 99-00『山河在り』
2000	3月 台北で結婚五十年を祝う会開催 『天球は翔ける』
2001	構想50年、陳舜臣文学の白眉『桃源郷』刊行
2002	2月 NHKの取材で台湾へ
2003	1月 台北へ。3月 台北、台南へ 『神戸 わがふるさと』『道半ば』『青山一髪』
2004	11月 台湾へ 05『曹操残夢 魏の曹一族』
2008	1月 二度目の脳内出血
2011	5月 未知様逝去
2015	1月21日 逝去。90歳 17『天空の詩人 李白』

陳舜臣さんにとって、脳内出血で倒れた七十歳からの二十年は、大きな制約を受けての作家生活でした。二〇一〇年四月六日『毎日新聞』「老いに学ぶ」の陳舜臣さんの文章です。

陳舜臣さん 老いを語る
「志 いつも曹操」

「九四年八月、七〇歳の時、脳内出血で倒れ五ヶ月入院しました。この時は、精神的にも肉体的にも衰えを感じました」「天災も大病も嘆いても始まらない」と続き、曹操の「歩出夏門行」第四段落四句、老驥伏櫪 志在千里 烈士暮年 壯心不已 を引用、

「老いたる名馬は厩で寝そべっていても千里のかなたまで走ることを夢みている。男は老いてなお意気盛んでなくては」と語っておられます。お亡くなりになる五年前の心境です。

老いに学ぶ

◆ご夫妻の二人三脚『わが心の自叙伝』執筆

1994年、脳内出血のあと、懸命のリハビリをしながら、左手で書いたり、左手を右手に添えて書いたりという時期が続きます。そして、2008年、再び脳内出血があり、『群像』連載中の「天空の詩人 李白」が絶筆になった、とされてきました。

しかし、その後も執筆はありました。2010年10月17日、神戸新聞連載「わが心の自叙伝」が口述筆記で始まります。このことは、自叙伝冒頭の「この原稿が口述筆記であることを、

わが心の自叙伝
陳舜臣

（署名は筆者、題字は妻・未知さん）

どうかご了承いただきたい」との文章でわかります。

左のタイトル画像、「わが心の自叙伝」は奥様（未知様）の字で、署名だけがご自身です。

毎週、日曜日の掲載でした。ところが、この連載は、おそらくあと数回だったと思いますが、奥様のご逝去で未完に終わっています。陳さんの気落ちを思うと、ことばがありません。